

# 日本行動分析学会ニュースレター

J-ABAニュース 1997年 春号 No. 7

## 会長就任にあたって

小野浩一(駒沢大学)

昨年12月の理事長選挙でご推挙を受け、この4月より3年間日本行動分析学会の会長を務めることになりました。よろしくお願い申し上げます。

日本行動分析学会は、学会としては1983年にスタートしましたが、その前身の行動分析研究会(1979年発足)時代を含めると、18年の歴史を持っております。私自身が、関わりを持ちはじめた学会設立後を考えてみても、行動分析学会を取り巻く環境はずいぶん変わってきました。心理学関係でも多くの新しい学会が設立されましたし、学問の多様化と学際化とはうらはらに、各領域の細分化と孤立化が一段と進んでいるように見えます。また、資格問題に絡んで学会の機能(学術団体か職能団体か)についての論議も巻き起こっています。

日本行動分析学会はその中で、基礎と応用の連携を強め、着実な発展を遂げてきました。何よりも「行動主義」や「行動理論」でなく「行動分析」という言葉をあちこちで見かけるようになったのは、会員の方々のたゆまぬご努力のおかげであり、大変喜ばしいことです。さて、せっかくの機会ですからこの紙面を借りて今後の学会運営についていくつか考えていることを述べさせていただきます。

### 真の学会活性化を目指す

どの学会でも活性化ということが叫ばれています。真の活性化というと今までは活性化していなかったとか、他学会の活性化は偽りであると言っているように受け取れますが、決してそういう意味ではありません。私たちの学会が個々の会員に対して今まで以上にどんなことができるかを考えようということです。

申すまでもなく、学会は個々の会員の研究や実践の上に成り立っているものですから、会員の活動が充実していれば、自ずから学会も活性化するわけですが、しかし、それだけでは折角学会を結成している意味がありません。会員が学会を盛りたて、学会が会員の活動をサポートするといった双方向の働きかけが望まれます。

今期の学会運営においては、このような学会と会員との、さらに会員相互の働きかけを促進させたいと考えています。このニュースレターの別のところで紹介があると思いますが、理事そして常任理事には新しい、若いメンバーが加わりました。常任理事会には、従来の担当の他に、広報委員会、企画委員会、研究委員会の3委員会を新設し、学会と会員相互の情報交換を活発にして、会員の研究実践活動のレベルアップと行動分析の普及を図っていきたくと思っています。また、本学会の特色でもありますが、会員が国際的に活躍する機会が今後も増えると思われまますので、国際的な活動をサポートするシステムを充実したいと考えています。さらに、本格的な倫理綱領を持つ学会として、研究・実践活動における倫理問題について、学会の内外に対してもっとアピールしていくべきだと思っています。

### Be practical

さて、すでに述べましたように、さまざまな活性化を図りたいと準備をしているわけですが、現実的に目を向けると、本学会は「財政難」という大きな問題を抱えています。これは機関誌の発行と無縁ではありません。「行動分析学研究」は当初、1巻1号の形だったのですが、5巻から2号発行されることになり、そして、8巻からは、B5判の新しい装丁となって、遅れ気味だった発行も今年度中には通常の発行サイクルに戻るめどもたちました。

昨年度の総会で学会費の値上げを承認していただいたとはいえ、長期的に見た場合、現在の会員数で年2冊発行していくのはかなり厳しい状態です。このような事情をご賢察いただき、会員の

皆様にはまずは会費をきちんと払っていただくようお願いいたします。それと、会員がもう少し増えると財政はずいぶん好転するものと思われま す。財政難緩和のために会員数を拡大するというと本末転倒になりますが、学 会活性化の「結果」として、会員数が増えることを願っています。《流れに棹 さす》「行動分析学研究」の表紙に紫色の四角いパターンが描かれています。デザイナーの吉岡千賀子さんによるこのデザインは、「流れゆくもの」をイメージしたものなのだそうです。それは、水、雲、風、そして行動かもしれません。時間の流れに従って生じる変異と選択、私たちの研究・実践活動もそこから逃れることはできません。現実的な判断になると、ともすれば、自らが属する組織の利益や存続のみを考えることが多くなります。それはもちろん 大事なことですが、そういうことばかりを続けていても発展はありません。「行動分 析」が心理学界、あるいは教育、福祉、医療、産業などの分野でいかに貢献できるか、また、すべきか、よりグローバルな視点で考えていくことが必要だと思ひます。会 員の皆様のご指導、ご鞭撻を「心より」お願い申し上げます。

小野新体制はすでに動き始めており、このjABAニュースも「広報委員会」の正式 な仕事として継続されることになりました。広報委員会としては他にインターネット 上でのホームページや会議室の開設、マスメディアにおける行動分析学のあり方などを検討していくつもりです。いいアイデアがある方は、編集局までどしどしご意見 をお寄せ下さい(編)。

## 私と行動分析学の出会い — 世にも不可思議な理事長がいたもんだ —

リレーエッセイ

小林 重雄(筑波大学)

生意気な若造がいた。大学に入学して心理学概論とか教職用の教育心理学や児童心 理学の授業を聞いて、自分の心理学についてのイメージとのギャップに愕然とし、途 方に暮れてしまった(昭和29~30年)。

ところが、2年次になって辰野千寿先生の演習を履修したところテキストとして「Essentials of Behavior」(Hull,C.L.)が使われたのです。一般的な学習理論は勿 論のこと、基本的な心理学の勉強もしていない者にとって、Hullの行動公式を中心とした記述が解るわけがありません。訳が指名されたら、あやしげな日本語を羅列する 以外に対応できません。

しかし、不思議ですね。あるタイプの生意気な若造は「これぞ学問に違いない」と感じたのです。「こういう勉強は先生の研究室に行くところですか」と尋ねたところ、「板橋の実験室に行けばよい」とアドバイスがありました。当時の東京教育大 学には大塚のキャンパスから電車と徒歩で40分程度離れたところに板橋分室というところがあり、生化学実験室(理学部系)、比較心理の実験室と美術系のデッサン実習 室(教育学部系)が配置されていました。そのネズミの実験室に行けば勉強できる ということでした。

先輩の方々の作った数え歌に「ヒツとせ、人里離れた板橋で、朝から晩までS-R、そいつはゴキだね、そいつはゴキだね。以下省略」とあるように、怖そうな 助手、研究生、院生が盛んにネズミをいじっているところに下っ端として混ぜてもらったわけです。英語の本で初めて最初から最後まで読んだのが Conditioning and Learning(Hilgard & Marquis) —もしかすると最初で最後の通読かも—でした。大 学の通常の授業はわずかな例外ははあるものの魅力がなく、板橋の実験室にたむろすることが多くなりました。しかし、困ったことに実験装置や飼育箱などを作る大工行 動スキルに重大な障害(著しい不器用さ)があり、糞掃除(毎週土曜日)と餌当番に 真面目に取り組んで存在をアピールしなければなりません。初めての英語の専 門書、先輩の実験の手伝い(ネズミ運びやハンドリング)、そして先輩方からの指導(耳学問)で、心理学の特定の領域については他の同級生の方々より物知りとなつていったわけです。

学習理論の勉強の中で「成程なあ、解る気がするなあ」と感じたのは Mowrer,O.H. の「二因論」でした。ですから、後になって「スキナリアンですか」と聞かれて「ハルーマウラリアンです」と咄嗟に答えてしまったことがあります。その後は「ハルー マウラリアン」が自己概念として定着してしまつたのです。

ネズミの実験室に4~5年間はうろうろし、修士課程修了を期に180度転換を目指し、臨床心理学

の世界へと移動しました(1960)。

臨床心理学の世界ではRogersのカウンセリング、Freud流の力動的立場が優勢でした。

1962年にアメリカのNew Jersey州にある神経・精神医学研究所の心理学部門に留学し、訓練部長であり精神分析家であるBlank,L.の元で勉強を始めました。しかし、そのDirectorがFranks,C.M.でアメリカの初代の行動療法学会の会長をした方でした。

彼はネズミの実験をしていた私の経歴をみて、「何故に精神分析を勉強するのか理解できない。行動療法を勉強すべきである」と主張されました。私は反論する程の英会話能力はなく、臨床に対応する基礎教養も不足していることもあって、Dr.Franksの提案に従ってEysenck,H.J.の文献を読むでは議論するという勉強をさせてもらいました。日本では異常行動研究会がEysenckのまとめた「行動療法と神経症」の翻訳を進めていた時期に、分担執筆者の1人であるFranksに巻き舌英語で議論をふっかけられていたことになるわけです。180度転換を目指したのに、360度転換になるのではという予感がありました。

東京オリンピック開催直前(1964)に帰国し、山形大学に勤めることになりました。せっかくアメリカで学んできたと思いこんでいたダイナミックな臨床心理学では現実的な問題を解決できず、マウリアンの行動療法家として行動することになったのです。そして、吃音行動と自閉性障害を中心に本格的に行動療法を看板とする臨床家として名乗りをあげることになりました。

1979年に本学会の前身となる行動分析研究会の発足を目指しての世話人会がもたれることになりました。山口薫先生から世話人会に出席するようお誘いを受けたのですが「私はマウリアンだから」とお断り申し上げました。しかし、「1人位はスキナリアンでない人がいる方がよい」という理由で会合に連れて行かれたのです。会合に出たばかりに、その後、世話人、運営委員、常任理事、そして理事長を体験することになったわけです。そんなことがあってよいのでしょうか。行動分析学会のメンバーであることの不思議さが減ってきたのは、J-ABAニュース(No.6)の研究室紹介シリーズ(第4弾)にあるように、私自身がルーズな教授であり、多様ないわゆるお弟子さん方がたくさん巣立っていきました。その中で「ラジカルな行動主義」に立つという若手が目立ってきたのです。指導に当たっている教授もそうであるに違いないと思われるのが自然でしょう。

枠組みからコントロールされているうちに私自身の考え方も随分と変容してきたように思っています。今、私はどの位までスキナリアンに近づいているのでしょうか(1997/04/15)。

別に仕組んだ訳ではないのですが、今回は前理事長の小林先生と新理事長の小野先生 の原稿が並ぶ形になりました。小林先生、3年間、ごくろうさまでした。先生が、「マウリアン」だったこと(不勉強な私にはこの世に「マウリアン」なるものが存在したことも)をこのエッセイで初めて知ることになる人も多いのではないかと思います。「マ」出身の「ス」として(?)、今後もご活躍を期待します(編)。

## お知らせ:行動医学会と同時開催!!

今年の年次大会はこうなる

日本行動分析学会第15回年次大会実行委員会よりご案内

本学会第15回年次大会は、第4回行動医学会学術総会と同時開催になります。生活習慣病の自己管理や、HIV感染予防、患者教育など、医療現場において行動分析が貢献しうる可能性は大きく、両者が積極的に情報交換することは、本学会の発展に必ずや寄与すると思われます。実行委員会では、現在、学会をリードする研究者を講師とするワークショップ(研修会)、海外からの研究者による特別講演など、充実したプログラムを企画中です。なお、今回は、夜を徹しての議論を可能にするべく、宿泊施設を兼備した会議場で開催することになりました。平成になってから建てられた、まだ新しい、シティホテル並の広さと快適さを持った個室に5000円で宿泊できます。発表申込など正式のご案内は6月上旬に郵送申し上げますので、奮ってご参加下さいませようお待ち申し上げます。

昨年、会場となる安田アカデミアに宿泊する機会があったのですが、会議室も、ホールもレストラン

も何もかも広々として、新しく、きれいで、こんなところで大会が開ければいいのになあと思っていたところでした。建物上部に宿泊のための部屋があるわけですが、これも立派で、今年はABAなみの大会になるのではと今からウキウキです（ちなみにABAは毎年有名ホテルで行われます。今年はシカゴのシェラトンでした）。行動医学会との同時開催というのも楽しみです。有意義な交流を期待します(編)。

## 「オズの魔法使い」: お家ほど良いところはない

シリーズ: jABAシアター  
— 行動分析的視点で映画をみると —

伊藤正人(大阪市立大学)

「虹のむこうのどこかに、子守歌で聞いた国がある。そこでは、どんな願いもかなう。星に願いをかけ、目が覚めたら、心配事がなくなる。そんなことにならないかな」と主人公の少女ドロシーが遠くの空を見上げ、思い入れたっぷりに歌う超有名な主題歌「虹の彼方に」とともにこの物語は始まる。

1939年に制作された、ジュディ・ガーランド主演の「オズの魔法使い」は、ミュージカル映画や娯楽映画の原点といえる作品であり、その後の映画作りに様々な影響を与えている(例えば、スティーブン・スピルバーグのヒット作バック・トゥ・ザ・フューチャーの随所に「オズの魔法使い」と類似した場面が現れる)。また、この映画は、いまだに年末になるとアメリカ中で放送される習慣があり、アメリカ文化の原点ともいえるのである(ピーターセン「続日本人の英語」岩波新書)。

主人公ドロシーは、カンザスのある農場に、叔父、叔母、3人の使用人、それにイヌのトートーとともに何不自由なく生活している。ドロシーの唯一の心配事は、地主のガウチ婦人がトートーを嫌って、捕まえようとしていること。このことを皆に訴えようとするが、だれも、仕事に忙しく、ドロシーは、かまってもらえない。そんな時に、ドロシーが切々と「虹の彼方に」を歌うのである。

ある日、ガウチ婦人にトートーが連れ去られそうになり、ドロシーはトートーとともに家出してしまう。その途中、興行師のマーベル教授に会い、水晶占いで叔母が悲しんでいることを知り、急いで家に戻ることにする。その時、竜巻が近づき、家は竜巻に巻き込まれてしまう。気がついて、家の外に出て見ると、そこは、カンザスとは違うカラフルな世界(ここからテクニカラーになっている)、オズの国だったのである。「トートー、ここはカンザスじゃないみたいよ」とドロシーはトートーに向かっていう。ここから、カンザスに帰るために、オズの魔法使い(オズ大王)に会いにゆくドロシーの冒険物語が始まる。

悪い魔女に妨害されながら始まったドロシーの旅に、頭脳がほしい藁で出来たかかし、心がほしいブリキのきこり、さらに、勇気のほしい臆病なライオンが加わり、オズ大王の住むエメラルドの都を目指すことになる。ここでは、ガウチ婦人が悪い魔女、使用人の3人がそれぞれ、かかし、きこり、ライオンになって現れているのである。ドロシーたちは、悪い魔女の妨害にもめげず、やっとの思いでオズ大王に合うことができたが、願いは叶わず、大王から悪い魔女を退治せよという難題を課せられてしまう。落胆したドロシーだが、皆を励まして、最後の試練に立ち向かい、とうとう悪い魔女を倒し、証拠のほうきをオズ大王に持参する。ところが、オズ大王は実在せず、男がカーテンの中でマイクに向かってオズ大王を演じていることが露見してしまう。ドロシーたちがどうしてくれるのかと詰問すると、オズ大王こと、ダメな魔法使い(興行師のマーベル教授がダメな魔法使いとなって現れている)が君たちの希望をかなえてあげようという。このくだりが行動分析的に重要なのである。オズ大王、いやダメな魔法使いの台詞を再現してみよう。

「かかし君。脳というものは、どんな下等な動物でも持っている物なんだよ。私の故郷では、たくさんのお若者が大学へ行く。卒業しても彼らの頭脳は君のと変わらん。ただ、一つだけ違うところがある。それは、彼らが大学卒業証書を持っていることだ。だから、君にもTHDの名誉博士号を授けよう」

「さて今度はライオン君。君は思い違いをしている。危険から逃げることを勇気がないと思っているのだ。勇気と知恵を混同しとる。私の故郷では、英雄のパレードがあった。彼らの勇気は君のとちっとも変わらん。ただ違うのは、彼らが英雄勲章を持っていることだ。だから、魔女退治の功績を称えて、勲章をあげよう。これで君も英雄だ」

「ブリキ君、君は心だったね。心はないほうがいいのだよ。心があるから辛い思いをするのだ。私の故郷には、善行を施す人がいて、心ある人と呼ばれておる。心の広さは君と変わらん。しかし、功労記念品を持っておる。だから、君に功労記念品を授けよう」

これらの台詞から明らかなように、ここでは、勇気、心という心的概念をその内的過程に言及せず、証書、勲章、記念品などのもの、外的刺激、すなわち条件性強化子として言及していることである。条件性強化の研究は、初期には条件反射研究のなかで反射の連鎖と反応が生み出す内受容刺激を扱っていたが、スキナーによる弁別刺激の概念化(弁別刺激は同時に強化機能を持つ)以降、オペラント条件づけの枠組みのなかで、内受容刺激よりも外的刺激を扱うようになってきている。

この部分は、バウムの原作とも異なり、この映画のオリジナルである。この映画が1939年に制作されたという事実は、当時の時代背景を考えると心理学史的にも興味ある問題である。1939年といえば、行動主義心理学から新行動主義心理学への移行の時期にあたる。前年には、スキナーの「有機体の行動」も出版されている。哲学では論理実証主義(エイヤー「言語・真理・論理」)、物理学では、操作主義(ブリッジマン「現代物理学の論理」)という考え方が明確になった時期でもある。フレミング監督がこれらの知識、特に行動主義的考え方を持っていたかどうかは不明であるが、恐らく、こうした時代背景がこのような台詞となって結実したのであろう。

さて、ドロシーの願いはどう実現されたのか。実は、オズ大王こと、ダメな魔法使いは、サーカスの気球乗りで、誤ってこの国にたどり着き、オズ大王に祭り上げられたというのである。そこで、この気球でドロシーをカンザスまで送り届けようという。これで、やっとお家へ帰れるとドロシーは安心するが、最後にもう一波乱が待ち受けていた。つまり、気球がドロシーとトートーを乗せないまま誤って舞い上がってしまったのである。万事休す！カンザスへ帰る手だてを失って、悲しみにくれるドロシー。その時、良い魔女、グリンドアが現れ、自分で分からなければとドロシーを諭す。ドロシーは「叔母さんに合いたいと思うだけではダメ。幸せを探そうと思ったら、お家の庭の外は見ないの。だってお家にはないものは、外で見つかるはずないもの」と大切なことに気づく。グリンドアは微笑んで、ドロシーの履いている魔法の靴の踵を3度ならし、「お家ほど良いところはない」と唱えなさいと教えてくれる。「オズの魔法使い」は、夢の国(ユートピア)への少女の憧れを描いたものであるが、結局、ドロシーの最後の台詞「お家ほど良いところはないわ」にあるように、どこにも青い鳥(ユートピア)はいないということを暗示しているといえよう。

## 報告：国際会議 (IN グアダハラ大学) 体験記

寺本 妙子(慶應義塾大学社会学研究科)  
teramoto@characin.flet.mita.keio.ac.jp

1996年12月1～3日にメキシコのグアダハラにて開催された「思考と言語に関する 国内(第4回)及び国際(第3回)会議(REUNION NACIONAL INTERNACIONAL DE PENSAMIENTO Y LENGUAJE)」に行ってきた。日本ではあまり知名度が高いとは言えないこの国際会議のことを教えてくれたのは、1996年10月に横浜プリンスホテルにて開催された「第3回行動主義と行動の諸科学に関する国際会議」にメキシコから来ていたある学生だった。

彼女とは、その時が初対面だった。ポスター発表をしていた私のところに彼女が現れ、じっとポスターを見入っていた。「説明しましょうか?」と共同発表者であった私の指導教官が英語で申し出ると、「英語は分からない」と答えた。「スペイン語は?」と尋ねると、「お願いします!」という返答。そこで、学部生時代に外国語学部 スペイン語学科に所属していた私が説明することになった。

卒業後それほど使う機会のなかった私のたどたどしいスペイン語を彼女は理解してくれたようだった。そして一言、「私の研究しているテーマと非常に近い!」。その後、彼女との会話が非常に弾んだのは言うまでもない。

彼女と私には多くの類似点があることが判明した。まず、研究テーマがそうであるが、お互いに既婚者であること、修士課程に所属していて進学を希望していること等々。また、親類に日系の方がいて日本に非常に関心を持っているとのことだった。

そのような訳で、彼女とは研究テーマを初め多くのことを語り合った。その彼女から、「私たちの研究テーマにとっても関係のある国際会議が私の大学(グアダハラ大学)であるから、是非参加し

たら？」と誘われた。現地に滞在中は彼女の家に泊めてくれるという。修論を抱えていた私には不可能だと思って、すぐに断った。が、帰国した彼女から何度もメールで誘いを受けているうちに、「参加してみようかな」という気になった。私には3つの大きな壁(修論の進み具合、家族(夫)の解、資金)があったが、トントン拍子に条件が揃い、メキシコへ生まれて初めて行くことになった。

会議の始まる数日前から彼女の家にホームステイさせてもらった私は、彼女の通う大学や市内観光に連れていってもらった。会議の準備で忙しいにも関わらず、彼女は知人に紹介してくれたりと、おいしいものを食べに連れていってくれたり、非常に手厚くもてなしてくれた。メキシコ料理(非常においしい!)もさることながら、私をひどく感動させたのは彼女の通う大学の研究科だった。それは、グアダハラハラ大学神経科学研究科(横浜での国際会議に参加されたV. アルカラス教授が学科長)である。

そこでは、言語獲得、言語障害、動物の認知、大脳生理等が研究されているとのことだった。まるで、私が興味を持っているテーマのオンパレードといった感じであった。その学生達と少し話したが、日本人は珍しいらしく、私に色々な質問をしてきた。「日本語は歌っているような滑らかなメロディーをしているが、日本語話者にも吃音(言語障害の一つ)の人はいるか?」とか、「日本ではどういう言語治療が行われているのか?」とか、「日本語で何か話して」とか様々な質問及び要求に答えながら、楽しく貴重な経験をさせてもらった。

このようなエキサイティング且つ貴重な体験を重ね、今回のメインである会議が始める以前に、私はすっかり興奮しかなり疲労していた。

3日間に渡る国際会議は、想像していた以上に興味深いものだった。開催されたシンポジウムの一部を紹介すると、以下のとおりである。

- ・「言語に関する心理学について」
- ・「文化的認知発達について」
- ・「障害児の概念獲得について」
- ・「言語獲得について」

発表は、国際会議であるはずなのに、スペイン語で行われていたので、私のスペイン語力では理解に非常なる困難を来した。論文集が手渡されていたのが唯一の救いだった。このようなテーマでの国際会議が頻繁に行われているというメキシコの事情を知って、驚くと同時に羨ましく思った。

ひょんなことから御縁のあった今回の国際会議ではあったが、来てよかったと心から思った。言葉では言い表せないほどお世話になった上記の彼女とは、今後お互いの研究について交流しようという約束し約一週間のメキシコ滞在を終えた。

帰国途中に立ち寄ったロサンゼルスでは、特殊教育に従事している知人にアメリカの障害児教育の現場を少しではあるが見せてもらい、新たな刺激を受けた。このような盛り沢山の10日間の旅行の後、疲れ切って帰国した私は数日間寝込んでしまった。しかし、数多くの貴重な体験に満ちた今回の旅行の思い出は、いつまでも私の中で輝き(?)続けるであろう。

## 報告:97年冬季応用行動分析研究会で考えたこと

奥田健次(発達教育研究所アトム)

年2回開催される応用行動分析研究会は、冬はたいてい上越教育大学の主催で行われることになっています。これはついでにスキーをエンジョイしようという意図があるようです。昼間スキーを楽しんで、夜は研究会で熱い討論をするという具合にスケジュールが組まれています。

さて、今回の研究会のテーマは、「おたくの臨床、どうやってんの、おせーて」というけっこうアグレッシブなサウンドをもつものでした。この研究会は、大学で行動分析学をそれぞれの領域で応用されておられる先生はじめ院生たち、我々のように地域で臨床を行っている研究所の臨床家、さらに学校の先生方が集まっており、ひと口に臨床といっても多種多様であることがわかります。各々の場で実践している臨床の内容について公開して互いに議論することが今回のテーマであったといえます。我々の発達教育研究所アトムからは、所長の谷晋二先生が発表されました。

以下に、今回の研究会で考えられた点を簡単にまとめ、報告いたします。

## 1. 「臨床」と「研究」の関係について

明星大学の山本先生は、大学で行われている臨床の文脈を強調されました。明星大学の臨床は、「サービス」、「(院生の)教育」、そして「研究」の3つからなる文脈があるというものでした。先生の話によると、以前、明星大学の学生の発表に対して「明星大学のは臨床じゃない」という言われ方をしたことがあったそうです。その発表者は研究の文脈で明らかにしたいことに取り組んでいたのに、そのように本来意味をもたない議論がなされていたというのです。逆に、ある院生が以前「教育関係の学生は臨床ばかりやって研究になっていない」というような批判を繰り返していたのを思い出すと、どうやら我々の研究会の中でも大きな誤解や無意味な議論に時間が費やされていたのではないかと思います。私はこのような議論を両極端の端からそれぞれ聞いたことがあります。「臨床ばかりで理論を無視している(確かに学校現場ではよくありますが)」とか、「研究のための理論を重視している人は臨床のりの字もしらない(実際、臨床をやってるつもりだが臨床とはいえないようなものもあります)」という、ありがちな議論を避け、多様な場にいる者同志が共通の議論の基盤をもつべきであるという山本先生のご提案には心から賛同させられます。上のカッコ内の現実には、フェアな議論で討議されるべき今後の課題といえるでしょう。

話は少しそれますが、似たような議論に次のようなものがありました。これは、私が養護学校にいたときの話です。教師歴30年のベテラン教師が、「大学の先生なんか、研究ばかりで現場のことなんか何も知らんのか」とありがちな批判をしていました。私は、「大学の先生といっしょくたに言うけど、現場での実践と縁を切ると何もできない研究というものもあるんですよ」と返事しました。我々が学校現場について理解しているほど、その先生は大学での研究について理解していなかったのでしょうか。残念ながら、このような紋切り型の議論が学校現場では日常茶飯事のように行われているという事実は、これを読まれている先生方もすでにお気づきのことでしょう。そういう意味でも、学校の現場(教育臨床が行われる場)でも、もっとフェアな議論の場が必要だと痛感するところです。

## 2. 親のニーズとは何か？

もう一つ、私が今回の研究会で考えさせられたことは、「親のニーズって何やろうか？」ということでした。いままで「親のニーズに応えることが臨床、教育、福祉、サービス上、重要だ」などとあたりまえのように言ってきましたが、少し疑問をもつようになりました。兵教大の井上先生の発表で、親にニーズをたずねても抽象的か、あるいは「よく分からない」という返事が意外に多いことが指摘されました。実は、私も少ない経験ながら、このことを感じていました。井上先生の発表から、親のニーズを聞き出すというよりも、何か子どもにとって有益なもの、ひいてはそれがその家族にとっても有益になっていくものを提案していく必要があるのではないかと思います。何か問題がはっきりしている場合はそれに対処すればいいのですが、特に大きな問題がないときに何をすべきかという問いは、学校教育に携わる者にとっても深く考慮していくべき点なのではないでしょうか。

## 3. 応用行動分析を学ぶ一個人として

私は、まだ発達教育研究所アトムで研究員としてお仕事させていただくようになって日も浅いのですが、今回の研究会に参加して自分が今後どうあるべきか、などということを再考させられました。学校にいたときなどと比べものにならないほど研究所の仕事はハードで、大げさかもしれませんがこの数カ月で何年分もの力となるものを得たような気がします。私自身は、これまでどうも理論先行で「アタマデッカチ君」だったと思います。ところが今では、理論が役に立つのはケース前とケース後で、ケース中(すなわち子どもと接している最中)は応用行動分析の理論よりも、感性が求められているのではないかと思います。スキーを滑っている最中も、いくら「エッジを立てる、体重を谷側に」と自分に言い聞かせてはいるけれど、あとから論理的に「うまく減速するためには、当然こうすべきやわな」などと考えます。応用行動分析家として成長するためには、理論とその理論を用いる技術をバランスよく習得することが大切だと思われました。そういうわけで、現在「アタマデッカチ」気味の私が発達教育研究所アトムで谷先生から厳しいご指導を受けていることは、そのでかいアタマを支える強い足腰づくりになるんだということでこの上ない環境であるといえます。実をいえば、私はバランスのとれた人間よりも「極端な」人間になりたいのですが(もうすでに極端だよ、などと聞こえてきそうですけども)。とにかく、我々のような民間の研究所に求められている応用行動分析の技術は何なのか、特に我々だからこそできることを地域社会に提供するため、微力ながら協力できればと思います。

今回の研究会では、私個人としては発表しませんでした。谷先生が研究所での臨床を発表され、私はその手伝いをしました。どうしても関西人、「ふたりよれば漫才する」と言われるように、ボケとツッコミ豊かなプレゼンテーションをやってしまいましたが、こんなプレゼンも許される応用行動

分析研究会に 今後さらに期待を寄せたいと思います。

研究と実践(臨床)との巧みな連携が応用行動分析学の武器だと考えていますが、応用行動分析学的臨床にもいろいろな違いがあるようですね。そのような違いを相手を非難したり排除するのに使うのではなく、相手を理解し自分の研究/臨床活動を理解するのに利用できる場というのは素晴らしいと思います。こんな「フェアな議論の場」が全国に拡大していくといいですね(編)。

## 報告:「学校教育における科学」と感激ケラースクール

島宗 理(鳴門教育大学) simamune@naruto-u.ac.jp

5月1日から3日までニューヨークで行われた『学校における科学(A Science of Schooling)』という学会に参加してきました。これは、Fred. S. Keller School の十周年記念に行われたもので、学校教育における行動分析学的アプローチに焦点をあてた大会でした。

Fred. S. Keller School(以下、ケラースクール)は、ニューヨークの郊外、Yonkersという街にあり、ニューヨーク州から障害児教育の学校として公認された私立学校です。ただし、not-for-profit。つまり利益をだすことは認められていません。コロンビア大学のGreer博士を中心とした行動分析家が始めた学校で、その名前はもちろん、スキナーと並んで行動分析学の創始者的存在であるケラー博士に由来します。今回のニューヨーク訪問で一番驚いて感動したのは、この学校についてです。子どもだけでなく、教師、スーパーバイザーまで、この学校で繰り返し広げられるほとんどの行動が行動分析学的にマネジメントされているのです！また学校教育全般に行動分析学を適応するGreer博士らの方法論は、CABAS(Comprehensive Application of Behavior Analysis to Schooling:カバスと読みます)として確立されており、ケラースクールだけでなく、幼児を対象にしたBabies Prep School、グループホームも併設し、青年以上を対象としたMargaret Chapman School、そしてなんと公立の小学校の障害児教室にも導入されているのです！ケラースクール、そしてCABASについては後述するとして、まずは大会のハイライトからご紹介しましょう。

Juniper Gardens Research Group: C.R. グリーンウッド博士

カンサス大学の応用行動分析学の人たち(Baer, Wolf, Risleyら)が中心になって25年以上も前に始めたプロジェクトが、応用行動分析学を使って障害児や勉強の遅れた子どもを助けるこのプロジェクトです。これまでに7000人以上の子どもが参加し、1200人以上の教師をトレーニングしてきたというから驚きです。それでも最初は教会の地下室を借りた小さな塾からスタートしたというのです。ちなみにこの話しは「行動分析学入門」の11章にでています。

Juniper GardensについてはAmerican Psychologistに参考になる文献があります。ポスドクを募集しているそうですから興味のある人はぜひどうぞ。

Greenwood, C.R., et al. (1992). Out of the laboratory and into the community: 26 years of applied behavior analysis at the Juniper Gardens Children's Project. American Psychologist, 47, 1464-1474.

応用行動分析学は求められている: S. グレン博士

ノーステキサス大学は世界で唯一「行動分析学部」が存在する大学です。そのリーダー、グレン博士の講演で印象深かったのは、行動分析学を実践できる人材が極端に不足しているという報告でした。ヒューマンサービス(障害児教育や福祉、医療など)の分野では、年々、採用条件に「応用行動分析」のスキルがあることを明確に記述した公募が、卒業生の数を上回る勢いで増えているということです。確かにメーリングリストなんかでもこうした公募がよく送られてきます。日本ではうらやましい限り... とばかりも言ってもらえないと思いました。

直接教授法の威力: C. L. ワトキンス博士

カリフォルニア州は移民が多く、英語が母国語ではない子どもがたくさんいます。そして経済的に



不利な家庭の子どもはどうしても公立学校に入れざるをえないから、そういう子どもは貧困地域の公立学校に集中しがちです。ワトキンス博士が学校コンサルタントとして働き始めたその学校には、なんと20以上の異なる母国語を持つ子ども達が通っていました。そしてその学校の標準テストの平均点は州平均よりもはるかに低いものでした(ちなみに全国的にみると、カリフォルニア州の平均は最下位だそうです)。ワトキンス博士は先生方と相談の上、効果的な教授法として直接教授法(Direct Instruction)を導入し、算数や読み書きなど、標的とするほとんどの分野で成績が向上したことを報告していました。

シカゴでは行動分析学が救世主:K. ジョンソン & T.V. J. ラング博士

財政悪化に伴って行政改革を進めていたシカゴの知事は、最初、教育の予算を削減しようとして教育省にプロジェクトチームを送り込みましたが、そこで眼にしたのは都市の貧困地域にある学校の圧倒的な成績の低さでした。お金の問題が絡んでいきますから、効果が実証されていてコストが低く、しかもすぐに導入できる介入はないかどうか検討が始まりました。プロジェクトチームが眼を付けたのが、行動分析学をベースにしたPrecision Teachingを使って成功していたMorningside Academy、そしてMarcom X Collegeでした。プロジェクトチームは公立学校に務める教師を再トレーニングすることを依頼しました。今ではPrecision Teachingが20の公立学校に導入され、効果を上げています。発表では、半年で数年の成績の遅れを取り戻すというデータを示していました。気をよくしたシカゴ市長は一気に300の学校に導入して欲しいと要望しているようですが、人員の不足と急速に大量に始めることによるサービスの質の低下を恐れて断っているそうです。ジョンソン・ラング博士らの論文もAmerican Psychologistの特集号に載っていますから、興味のある方はどうぞ。

Johnson, K. R., & Layng, T.V. J. (1992). Breaking the structuralist barrier: Literacy and numeracy with fluency. American Psychologist, 47, 1475-1490.

行動分析学の天国:ケラーズスクール / J.S.トワイマン博士(ディレクター)

さて、ケラーズスクールです。現在、60人以上の3-4才児が通学しています。この子ども達は心理学者(いわゆるテスト屋さん)によって特別なケアが必要であると判断された子ども達で、重度から中程度の学習障害児や自閉症児がほとんどのようです。学校内に教室は6つあり、それぞれに教師が2人、助手が2人つきます。州から認可されている学校であり、障害児と認定された子どもには国から補助金が配布されますから(実際には国から8割、地方自治体が2割負担)、親はいっさいお金を払いません。学校はすべてこのお金で運営されています。

興味深いのは、この学校ではすべてのカリキュラムがスキナーの言語行動の理論にもとづいて開発されていることです。廊下を歩いているだけで、教師達の会話からマインドとかタクトとか話し手訓練とか、耳慣れた言葉が聞こえてきます(これだけでも、まるで天国にいるような気分になります)。

学校には独自の行動査定システムがあり、入学するとまずこのテストが2-3日かけて実施され、それぞれの子どもに欠けている行動と獲得している行動が明らかにされます。そしてテストが済み次第、欠けている行動を獲得している行動のリストへ移行すべく、トレーニングが開始されます。

トレーニングはロバース式の不連続試行法や、SRA社から市販されている直接教授法の教材を使った集団場面訓練、高機能の子どもにはワークシートを使った自律的な課題など、子どものレベルにあった様々な課題を使っていますが、教師はいつもクリップボードにデータシートを挟んだものを手にして、すべての行動を記録しています。

ケラーズスクールでは、教育の基本単位を「ランユニット」と読んでいます。これは3項随伴性のことで、たとえば、マッチングの課題なら「A」「B」「C」のカードを机に並べて、教師が「Aはどれ?」というのが刺激、子どもが「A」のカードを指さすのが行動、教師が「そうね。おめでとう」と言って誉めるのが強化で、これが1つのランユニットになります。1人の子どもに対するランユニットの数をできるだけ増やすのが望ましいというのは直感的にも分かるし、最近のロバースらの研究からも実証されています。

ケラーズスクールでは、実施されたランユニットの数(つまり提示された試行回数)と正解だったランユニットの数(正解数)を、子どもごとに算出するだけでなく、教師ごと、クラスごと、教師を監督す

るスーパーバイザーごと、そして学校全体でまとめて集計して、そして、ジャーナル、壁に掲示しています。学校の廊下を歩きながらなんとなく根元的な快感を感じてしまいました。

各グラフには提示されたランユニットと正反応だったランユニットの数がプロットされています。こうしたグラフは、もちろん、子ども1人1人のプログラムについて、その行動が獲得されたとみなすかどうか、そして次にどんなプログラムをするか、また、正答率が上がらない場合には、何が問題で、どんな介入をするのかなど、教育上の様々な意志決定をするのに使われます。まさに、行動的データに基づいて教育が行われているのです。

教室に入っていくと2~3人の教師がそれぞれ子どもと向き合って課題を進めています。1秒1秒、ランユニットがすごい勢いで消化されていくこの光景はまさに圧巻でした。パニックをおこして泣いている子どももいましたが、たいていは集中して課題を遂行していました。青年以上を対象としたチャップマンスクールでも聞いた話ですが、タイムアウトなどの嫌悪的手続きはほとんど使わないですむそうです。確かに、トレーニングの様子をみていると、かんしゃくを起こしている暇などないという感じです。

この先生達はそんじょそこの先生とは訳が違います。まず、面白いのは、ほとんどが大学で行動分析学で学んだのではなく、ケラーズスクールに就職してから行動分析学を勉強し始めたということです。実践とともに、先生用にはPSI(Personalized System of Instruction)が個別に作成されています。その進み具合によってランクが1から、2、3、4、マスターとあがっていき、給料はこの位によって決まってくるという職能制になっています。PSIのモジュールは、(1)行動分析学についての知識、(2)データを読みとったり、介入方法を考えたりする技術、(3)そして実際に子どもに訓練を施すための療法家としての技能の3つの分野に別れていて、それぞれに合格基準が設定され、テストを受けることで合否が判定されます。助手にはまったくの素人を雇ったりもするようですが、それでもやはりPSIに基づいてトレーニングがなされ、数週間で子どもを相手に訓練ができるようになるというから驚きです。それから、Columbia Universityの教員養成大学院、The Teachers Collegeから、この学校の創始者でもあり、CABASの提唱者でもあるGreer博士の研究室の学生が実習にやってきました。

これはゴシップのようですが、実は、ロバースのプログラムが、キャサリンモリスの「わが子よ声を聞かせて」(NHK出版)で全米的に有名になってから、ロバースの垂流というか、昔UCLAでロバースの授業を1コマとただけのような人が新聞広告に週30時間のトレーニングをうたった広告を載せるようになってきているそうです。もちろん、訓練には量だけではなく質が重要です。このような人の中にはどうやら幼児虐待に近いことをする人もいるらしく問題になっているそうです(ちなみにニューヨーク州では、フロリダ州に次いで現在、行動分析家の資格認定システムを検討中だそうです)。また、ロバースのプログラムを認識した親が「効果的な治療を受ける権利」を楯に裁判を起こし、行動分析家をセラピストとして雇った場合の経費を州が支払うように要求しているそうです(どうやらこれは親の勝訴になりそうです)。こうなると州や学区は裁判でお金がかかるくらいならということで、信頼できる機関の行う行動分析的早期治療へは比較的財布の紐をゆるめるということでした。

ケラーズスクールでも、公立の小学校であるP.S.176でも、親訓練は重要なプログラムとしてみなされているようです。P.S.176を訪問したときには、ちょうど、背広姿のお父さんが(会社から昼時間に抜け出てきたのでしょうか)、子どもと教師と一緒にタクト訓練をしていました。ケラーズスクールの廊下の一面には、こうした親訓練の成果が、1週間あたりのランユニット数としてグラフ化され、掲示されています。それから親がデータをとった研究発表もポスターになっていて、やはり廊下の壁にはってあります。いくら学校で集中した訓練によって行動が獲得されても、それが家庭で消去されては意味がないので、般化・維持を考えても、親訓練は欠かせないとのことでした。

1週間という短いながらも密度の濃い時間を過ごし、帰国する飛行機の中で、自分は、行動分析学のパワーをあらためて確認するとともに、研究室からでてコミュニティの中で実績を作ってきた人たちの努力に感動していました。『あと10年のうちに追いつこう』そう決意した旅でした。

\*CABASについては、たとえばGreer, R. D.(1994). A systems analysis of the behaviors of schooling. Journal of Behavioral Education, 4, 255-264. などをご参照下さい。

\*\*より詳細なレポート(写真つき!)は私のホームページをご参照下さい(<http://www.naruto-u.ac.jp/~simamune/home.html>)。

明星大学人文学部心理・教育学科心理学専修(山本研究室)

## 研究室 &amp; 研究会紹介シリーズ 第5弾

清水裕文(明星大学修士課程2年)

明星大学は、行動分析学を専攻する教員の割合が高い(9名のスタッフ中3名)大学です。菅野衷教授は理論的行動分析、小美野喬教授は実験的行動分析、山本淳一助教授は応用行動分析と、行動分析学の3本柱がそろっています。また、大学院は修士課程、博士課程があります。

ここでは、私が属している応用行動分析の山本研究室の紹介をします。

山本先生は、子ども特に発達障害児の応用行動分析を専門にしている、臨床心理士でもあります。

大学学部のゼミ(3年、4年)では、行動分析学の基礎を、「行動分析学入門」「はじめての応用行動分析」などのテキストを使ってその基礎から、徹底的に学びます。ゼミでは、問題解決型の思考の訓練がおこなわれます。例えば、次のような問いが、毎回投げかけられます。「こういう子どもがいます(子どものプロフィールの紹介)。あなたが、セラピスト(教師、施設職員、心理相談員)だったら、具体的にどうしますか?」。様々なケースについて、そのような問いに答える訓練を経ることで、「ターゲット行動はどう選択すべきか?」「どのような技法を用いるか?」「どのような介入計画を立てるか?」「データはどう収集し、どう整理するか?」「データから何を読み取るか?」「社会的妥当性などの倫理的問題をどう考えるか?」などのことを、具体的な問題解決という点から離れずに、行動分析学の知識として身に付けていきます。

研究室は、近隣の小学校、療育機関との連携があり、そこで卒業論文のデータを収集する学生も多いです。

さて、大学院です。大学院には、心理相談室という付属の機関があり、そこでの臨床、研究、教育(を受けること)が私たちの生活のほとんどをしめています。現在、修士2年生が4人、1年生が1人の計5人が山本先生のもとで、臨床・研究生活を送っています。現在、相談室に週1回来ているケースが8ケース(院生はすべてのケースに参加します)、それにプラスして、近隣の小学校や療育機関(5ケースも!!)で、臨床・研究活動をしている同級生もいます。1週間は、図1のようなシステムでまわっています。行動介入の設定に関しては、臨床的な意義と研究的な意義の双方が常に問われることとなります。

私たちは、◆各ケースの事後ミーティングでの臨床的スーパーバイズ(必ずセッション中のビデオを再生しながら、どのような刺激が出されていたか、それがどのような機能をもったかなどのフィードバックが行われます)、◆週1回火曜日のデータミーティング(ひとり1時間で5時間連続で行います)による研究上の指導を受けます。

山本研究室の特徴のひとつとして、充実した研究環境があげられます。明星大学は、私立大学の中でも学費がかなり高く、それゆえに入学を断念する方も多いそうです。しかし、山本先生の科学研究費などを投入して、その学費に見合うだけの研究環境が整備されています。入ってみればその豊かさに気がつきます。たまに、これが当たり前だと思ってしまう学生もいるようですが。例えば、大学院生になれば、一人一台のコンピュータ(マッキントッシュ)が与えられ、臨床レポートの作成、実験データの整理や実験用プログラムの作成、論文の執筆など、あらゆる作業がそこに集約されるよう設定されます。

ただ、コンピュータがただの箱になるか、生産性を生み出すかは、ひとえに人的環境を中心としたシステム作りとその鍵があると思います。全てのコンピュータはネットワークでつながっており、リアルタイムで、「あのデータ見たいからメールして」とか「レポートの文章直しといたから、プリントアウトしてからファイルして」などのやり取りが常に行われています。

## 図1 山本研究室のケース運営について

また、それらの環境では、臨床、研究の成果を論文として執筆する指導がなされています。各学会誌の投稿規定は、大学院生必携のものです。これは、学問の進歩のためには、まず「書いて」、「仕事をまとめて」、それをもとに相互批判をすることこそが重要であるという山本先生の考えにもとづいているのだと思います。

臨床活動は、各セッション内で課題を担当する「課題担当者」と、それらの課題を統括し、ケース

そのものに責任をもつ「ケースマネージャー」によって組織化されています。大学院生が、それぞれの役割をもっているのです。

さて、次の特徴になりますが、データによるコミュニケーションが前提となっていることを紹介しましょう。山本研究室では、「データをもって語らしむる」、という姿勢が徹底しています。来談したケースの相談活動、臨床的介入のことをセッションと呼んでいます。セッション中は実に様々なデータを収集しています。課題そのもののデータはもちろんですが、その他、子どものチックなどの問題行動の数、離席時間などを測定します。またセッション中の子どもの発した言葉や、ワンウェイミラーからセッションの様子を見ている親御さんの話しを全て記録したりします。これは、主として、臨床の補助をお願いしている学部生の仕事です。このように、ありとあらゆるデータを収集します。このようなデータは、とすれば自分の課題のみに目が行きがちな私たちが、ケース全体の臨床上的変化を、「客観的なデータ」をもとに見通す上で、本当に役に立ちます。これらのデータをもとに、現在の状況を把握し、次なる展開を考察することになります。各ケースに関するミーティングでは、データを中心に話を進めると、共通の基盤で生産的な議論ができることを実感しています。データの収集は、とても大変な作業のように思いますが、実はとても大事な作業で、まずそこから始めなければ、何事もうまくいかないことを学生すべてが感じていると思います。

さて、次の特徴を紹介しましょう。3つ目になるでしょうか。山本研究室は、いつも夜が遅いというのが、大学ではかなり有名です。向いの理工学部の化学科や物理学科の電気がついていながら帰るのはプライドが許しません。11時40分の終電ぎりぎりまで仕事をし、いつも駅まで走っています。ただ、私たち大学院生は、それを楽しんでます。その中でも山本先生は、朝の8時に研究室に現れ、夜の11時に帰宅します。(帰宅されたらすぐ、筑波大学の武藤さんより伝授されたダンベル体操(J-ABAニュース第4号参照)をして翌日に備えているようです。)研究室の自分のコンピュータの前に座って作業をしていると、だんだんエンドルフィンが出てきます。隣で作業をする同級生のキーボードを打つ音が段々、快感になってきて自分の作業も止らなくなって来ます。

このように臨床データや研究データをまとめてミーティングに出ると、山本先生から、必ず適切な臨床、研究上のフィードバックやアドバイス(時には、指示や命令もありますが)を受けられます。それによって、その次のセッションで、必ずうまくいくのです。そのことで、自分の臨床、研究上の力量が上がっていくことが実感できることが、一番大きな強化だと思います。臨床、研究上の問題を解決出来たことの喜びは何ものにもかえがたいものです。それが、私たちの臨床、研究行動を維持しているものだと思います。

研究室の娯楽は、臨床、研究の話や議論をすること…。やはり、それが一番楽しいです。お酒は特にいりません。もっとも冬は、山本先生を先頭に、学部生、大学院生の皆で取りつかれたようにスキーをすることが大きな娯楽です。

山本研究室の特徴はまだあります。とてもこの紙面では紹介しきれないくらい。どうか皆様。発達障害児の臨床に興味のある方々は、実際に山本研究室へいらっしやって、その随伴性に身をおいてみるのはいかがでしょうか。

---

個人的にもいろいろとお世話になっている明星の山本研究室でした(清水君、去年はハイパーカードのスタッフありがとう)。明星の心理は1学科あたりの行動分析家の数が日本ではトップクラスではないでしょうか?これからのさらなる発展に期待します(編)。

---

## お知らせ 新理事と職務の紹介

本年度から3年間、学会常任理事・理事としてご活躍いただきます先生方は下記の通りです。常任理事の先生方は、それぞれ()内の職務を主に担当されます。(敬称略、アイウエオ順)

### 【理事長】

小野浩一

### 【常任理事】

浅野俊夫(研究委員会: 会員の研究・実践活動のレベルアップ [シンポジウム、

出版など] )

氏森英亜 (財務: 会計の統括、財政の安定)

河嶋 孝 (渉外: 学会の対外活動の統括)

小林重雄 (企画委員会: 諸活動の企画・実行を通じた行動分析学の普及、会員数の拡大)

佐藤方哉 (総務: 事業・会務の全体的統括)

島宗 理 (広報委員会: ニュースレターの編集、ネットワークによる情報公開など)

中野良顯 (国際: 学会の国際活動の推進、ABAとのコンタクト)

藤 健一 (編集委員会: 機関紙編集委員長・編集業務)

藤田継道 (倫理委員会: 「倫理綱領」に定める業務、倫理問題に関する内外へのアピール)

望月 昭 (企画委員会: 同上)

山本淳一 (研究委員会: 同上)

#### 【理事】

井上貞郎、加藤哲文、金子尚弘、作道秀樹、佐久間徹、杉山尚子、長谷川芳典、  
渡部匡隆

さらに事務局担当は以下の通りです。

理事会担当: 青塚徹 (BYS07032@niftyserve.or.jp)

学会業務担当: 山岸直基 (VYC13337@niftyserve.or.jp)

冒頭の「挨拶」からもわかるように、小野新理事長は学会のさらなる活性化のためにかなりアグレッシブな作戦にでそうです。理事の役割を再検討し権威の移譲を行うこともその現れだと思います。行革のキーワードとしてしばしば『アカウントビリティ』が指摘されますが、これこそは、具体的な行動に着目し強化随伴性を設定する行動分析学的発想ですよね。でも「活性化」は理事会だけでなく学会全体に広まらない となりません。そこで提案です。

実は、上にあがっている各委員会のメンバーはそれぞれ担当の理事が独自に依頼して構成することができるのです。でも、逆方向の働きかけがあってもいいと思うのです。つまり、我こそは～委員として仕事がしたい！画期的な提案がある!!という方は、ぜひ手をあげて、担当理事までご連絡下さい(編)。

## ニュース 快挙！ 佐藤方哉教授 ABA次期会長に決定！

ABA事務局からの情報によると、去る4月に行なわれた国際行動分析学会会長選挙において、会長候補としてノミネートされていた佐藤方哉教授(慶應義塾大学)が大差で当選されたとのことである。昨年の選挙では、予備選を第1位で通過されたものの、本選では2票差(無効票が1票あり実際は1票差)で敗れたが、この度めでたく雪辱を果たされた。本年5月末に開催されたABA第23回年次大会で次期会長としてExecutive Councilに推挙され、1998年のオーランド大会において第23代会長に就任する。なお、アメリカ合衆国在住者以外のABA会長の誕生は史上初の快挙である。また、これとは別に、佐藤教授は、去る5月23日、国際行動分析学会第23回年次大会の開会

式において、同教授の永年にわたる行動分析学の普及と国際的な貢献に対し、SABA ( Society for the Advancement of Behavior Analysis)より国際貢献賞を授与された。授賞式に引き続き行われた記念講演で、同教授はMy Forty Years with Behavior Analysisと題する講演を行い、40年の研究史と日本の行動分析学の発展を概説、さらに日本の科学と西洋の科学をそれぞれ、Sushi ScienceとHamburger Scienceと呼称したMotokawa(1989)の分析に基づき、今後は事実を重視する前者と、理論構築を重視する後者を統合したSukiyaki Scienceをめざす必要性を説いた。講演は聴衆に大きな感銘を与え、とりわけ、SABA会長のフォックス教授は、「ユーモアと歴史と重要な提言が絶妙のバランスで含まれた見事な講演であった」と絶賛した。(シカゴ発外電 杉山尚子)

今年のABAは史上初の参加者2000人突破で盛り上がりを見せていたようです。この赤丸急上昇の次期に会長に就任される佐藤先生には期待大です。jABAニュースでは初のアメリカ合衆国在住者以外の会長になる佐藤先生へのご提案、励まし、その他を募集します。せっかく日本人(アジア人)が会長になったんだから、こんなことをして欲しいという意見がございましたら編集局までどうぞ(編)。

## ニュース 訃報 小川隆先生逝く

平成9年4月16日(水)午後5時15分、慶應義塾大学名誉教授／元明星大学教授である小川隆先生が、呼吸不全のため逝去されました。先生は、1952年、わが国に初めてデンシヨバトのオペラント条件づけを導入され、日本における実験的行動分析の礎を築かれました。同時に多くの後進を育成され、その多くは日本行動分析学会の重要な地位にあります。1995年に明星大学で行なわれた日本行動分析学会第13回年次大会で、「方法論としての実験的行動分析」と題する記念講演をされたのが最後の講演になりました。合掌(杉山尚子 記)

## 募集 Mexican Journal of Behavior Analysis 特集号

メキシコ行動分析学会の学会誌、Mexican Journal of Behavior Analysis が来年、日本の行動分析学会の特集を企画しているそうです。日本における行動分析学会の研究を南米、スペイン語圏へ紹介する機会でもあります。投稿したい方、もっと詳しいことをご存知になりたい方は、慶應義塾大学の佐藤方哉氏(e-mail: VYB07672@niftyserve.or.jp)までご連絡下さい。

### 訂正

J-ABAニュース第6号に掲載された「jABAシアター」に一部誤りがございましたので以下のように訂正・お詫びいたします(編)。

誤:「スキナーは、1976年に慶応で開催された日本心理学会大会で、「罰なき社会 (The non-punitive society)」と題する印象深い講演を行った(行動分析学研究第5巻に掲載)。(p.5)

正:「スキナーは、1979年に慶応から名誉学位を授与されたとき、その記念講演として、「罰なき社会 (The non-punitive society)」と題する印象深い講演を行った(行動分析学研究第5巻に掲載)。」

また、同じ号に掲載された「リレーエッセイ 私と行動分析学会の出会い」に以下の誤りがございましたので訂正させていただきます。

誤:「小川先生がまず最初に読むようにと示された論文は、(中略) SkinnerのAre the theories of learning necessary? (1950) 」

正:「小川先生がまず最初に読むようにと示された論文は、(中略) SkinnerのAre theories of learning necessary? (1950) 」

## 編集後記

- 4月から小野理事長の新体制がスタートすると共に、事務局が筑波大学の心身障害学系から駒

沢大学の文学部に移転しました。3年間、たいへんな仕事を引き受けて下さった筑波のスタッフ、特に大石・野呂さんには感謝です。去年は学会の経済状況が悪化したこともあってその対策に追われ、学会発表もキャンセルしなければならなかったほどと聞いています。本当にごころうさま。ありがとうございました(今年は本業の研究に期待してまっせ!)

- 新事務局は小野先生以下現在6名の大学院生の方々が事務局の運営に協力して下さっています。この中で、J-ABAニュースの担当はJ-ABA3号に「マーフィーの法則を行動分析的に考える」を書いてくれた山岸直基さんです。いろいろご迷惑をおかけすると思いますが、よろしく願いいたします。
- この号を編集している現在、シカゴではABAが... 同時にアメリカの友達からのメールがハタと途切れて何だか寂しい思いです。でも今年には日本から総勢15名以上の参加者があるはずで、帰国後のレポートにも期待できます。

---

#### J-ABAニュース編集局

〒772 鳴門市高島 鳴門教育大学 人間形成基礎講座

島宗理 TEL 0886-87-1311(内340) FAX 0886-87-1053

E-mail simamune@naruto-u.ac.jp

皆様からの記事を募集しています。研究室や施設の紹介、用語についての意見、学会に対する提案や批判、求人求職情報、イベントや企画の案内、ギャクやジョーク、その他まじめな討論など、行動分析学研究にはもったいなくて載せられない記事を期待します。原稿はテキストファイルの形式で、電子メールかフロッピー(DOS/Mac)により編集局までお送り下さい。2000字程度を目安にし、本紙1頁におさまるように考えていただければ結構です。

尚、次号の〆切は97年8月31日です。